



TITLE:

木村博士夫妻と叡山へ

AUTHOR(S):

CITATION:

木村博士夫妻と叡山へ. 天界 1928, 9(94): 100-101

ISSUE DATE:

1928-12-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161367>

RIGHT:

緯度變化の問題と同様に、方位角 Azimuth 變化の問題も興味あるものである。緯度變化は一般に

$$\Delta\varphi = x \cdot \cos\lambda + y \cdot \sin\lambda$$

の公式で與へられる。但し、 φ は緯度、 x と y は北極移動の要素、 λ はグリニチ經度である。しかるに、方位角變化 ΔA は

$$\Delta A = (x \cdot \sin\lambda - y \cdot \cos\lambda) \sec\varphi$$

であるから、高緯度の土地で觀測すれば、 $\sec\varphi$ は大きいから、從つて ΔA は大きくなつて、觀測は比較的容易である。又、同じ土地で、同時に緯度變化と方位角變化とを觀測すれば、上の二つの式から、 x と y を共に算出するこの出来る便利もある。故に、とにかく、方位角の連續觀測は將來大に推奨すべき事業であらう。尤も、方位觀測を今までの普通の方法即ち星の子午線通過で行ふのは非常に困難な事であるから、むしろ、北極に極めて近い星や星の極大離角を、適當に作つた目標によつて測ることをするが好いと思ふ。但し、今までは、目標を非常に遠方に設けたがため、空氣中の光線の横屈折に妨けられて失敗した人があつた。自分の考へこしては、目標の土臺を丈夫に作れば、必ずしも之を遠距離に置かないで、僅々100メートル位でも好からうと思ふ。云々。(文責は編輯者にあり)

木村博士夫妻と叡山へ

御大禮參列のため入洛せられた木村榮博士を案内して、去る十一月12日、午前中、吾等は花山天文臺敷地へドライブしたが、其の日の午後、幸ひの日和を利用し、比叡山に登つた。一行は木村博士夫妻と上田山本兩家々族で總勢七人、其の面々は本頁の寫眞の通り。

正午、出町柳驛から電車に乗り、八瀬からケーブルで、1時前に山上の驛に着。レストランで午餐を認めた。それから徒歩で四明ヶ嶽に登り、景色を眺めたり、記念寫眞を撮つたりした後、東へ北へ嶺を下つて、延曆寺の此所彼所を歩いたが、4時頃、又、ケーブルで坂本に降り、直ちに電車で大津へ着き、二つ三つ買ひ物をした後、京津電鐵で京都へ歸り、四條橋畔で晚餐を頂き、それぞれ家に歸つたのは9時半であつた。

比叡山の上、將門岩を背にして



山本 木村夫人 木村博士 上田 山本夫人 上田夫人
修坊

此の日、御大禮参列の外國大使たちが、大禮使接待員の案内で、やはり、比叡山へ登つたため、吾等の行く先きざき、到るころ皆きれいに掃き清められ、警戒も行き届いてゐたので、誠に幸ひであつた。右頁の寫眞の、巖の上や嶺の上に往來してゐる人影は、皆此等の外國人たちと、其れを接待する人たちの群れである。

天氣は、空に淡い雲を浮ばせた長閑な秋日和で、空氣は澄んでゐたため、京や大津の景色ばかりでなく、東には琵琶湖の島や山や、更に遠く加賀の白山の姿も見えたので、金澤出身の木村博士夫妻は限りなく喜ばれた。西には又、日光を反射して輝やく大阪灣の海波が見えた。(山本)